第１章　大学の理念・目的および学部・研究科の使命・目的・教育目標

１．大学の理念・目的

①理念・目的等
Ａ群　大学・学部等の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的の適切性
Ａ群　大学・学部等の理念・目的・教育目標等の周知の方法とその有効性

「現状分析」

本学は、神と隣人への「愛」に生きることを要としたキリスト教に基づく福岡女学院の建学の精神に則り、改革的精神と普遍的視野を合わせ、時代を創造する主体的人格を持つ女性を育成するために、広い教養と深い学問に関する教育・研究を行なう。本学院聖句「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」が示すように、神の前に、師と、友と、そして学問とつながることにより、生きる力を獲得し、自他を活かす大きな実を結ぶことが可能となる。よって本学は「つながり」を提供し、創造的に成長し続けるかけがえのない個性として光となる人材を世に送り出すことを通じ、社会に貢献していくことを理念・目的とする。

本学の理念・目的の実現のために、1990年には、母体である福岡女学院のキリスト教に基づく人格教育の伝統を受け継ぎ、日本の文化・風土におけるキリスト教を基盤とする人格教育および価値の探求を目指す人文学的教育・研究を重視し、地域における特色のある女子高等教育機関として人文学部（日本文化学科・英米文化学科）を設置した。高齢化、国際化、情報化等が進む中で女性の社会進出に伴い、女性の地位と役割が世界的に著しく変化・拡大している現実を踏まえ、1999年には、現代社会の要請に応え得る女性の育成を目指し、人間関係学部（人間関係学科・人間発達学科）を設置した。

さらに、2001年には、社会環境の急激な変化に対応するため、それまでの専門分野における知識の修得に加えて、実践的な能力と関連諸分野への理解を身につけた人材の養成をすべく、人文学部の改組を行ない、旧学科を発展的に改編して当該学科において展開してきた学問領域を横断的に再編することで、現代文化学科と表現学科を設置した。2003年には、急速なグローバル化を遂げた世界情勢の中で、英語による自己表現能力が従来にも増して重要なものとみなされるようになったことを受け、国際共通語としての英語の基礎的な知識の修得はもとより、今日的な諸課題に対する実用的な言語運用能力や実務処理能力の修得を行ない、教育ならびに実務に必要な英語の修得を目指すことを目的とした英語学科を人文学部に新設した。同時に、2003年には、学部教育の連続性と発展性を確保するため、人文学部および人間関係学部を基盤とする人文科学研究科（修士課程）を設置した。　理念・目的・教育目標と人材養成の関係をより具体的に見るなら、下記のようになる。

第一にキリスト教に基づく教育の目的浸透と達成に大きな役目を果たしているのは、キリスト教に関わる教育や活動である。これはチャペルと授業という中心的な二つの活動とその他の諸活動により成り立っている。月曜日から金曜日まで毎日20分間の礼拝形式で行なわれるチャペルは、教職員と学生がキリスト教の精神や大学の歴史に触れ交わる場である。また、１年生から３年生まで必修となっているキリスト教関連科目では、キリスト教の人間観、世界観を学び、普遍的な人類愛と人間の尊厳について理解を深めることができる。また、キリスト教センターの働きによって、施設

訪問等のボランティア活動に積極的に取り組む機会を提供していることである（詳細は「第10章①」を参照）。

第二に、普遍的視野を持ちながら時代を先駆け、リードしていく女性育成のための女性教育である。カリキュラムにおいて、ジェンダーに関わる科目を置き、現代における女性の地位を踏まえ、変革していく女性像を明らかにしている。また、男女共同参画に必須となる「リーダーシップ」等の経験は、共学教育の大学においてはともすれば機会を逸しがちとなるが、授業やクラブ活動を通じて日常的に享受できる。さらに本学院の歴史を支えた創始者や女性教員の働きや存在が女性のライフ・モデルを提供している。

第三に、広い教養と深い学問の双方を目的としたカリキュラムによる教育・研究を挙げることができる。主に、教養については大学レベル、学問については学部・学科レベルで、継続的に点検・評価を行ない対策も講じている。

第四に、主体的人格を持ち、かけがえのない個性として光る人材育成を目的とし、カリキュラムの充実のみならず、少人数教育も実施している。

第五に、社会貢献を重んじる大学全体の姿勢である。福岡女学院は開学時より社会生活向上への貢献を目指しており、カリキュラムにおいても社会貢献を視点においた教育を充実している。社会貢献の中心になるものは、研究成果の社会への還元、地方自治体の政策形成への寄与や、生涯学習センターの中で地域社会に向けて開かれている諸種の講座などが挙げられる（詳細は「第10章①」を参照）。また、地域連携による社会貢献についても、臨床心理センターの開設、子育て支援への取り組み等、新たな展開にも着手している。

最後に、「つながり」の提供という視点から、本学の理念・目的を具現化しているものは、学部・学科の壁を越え学生同士・学生と教員がともに学ぶ環境を提供するカリキュラムをはじめとし、高大連携教育、同窓会との連携等、時系列を超えた「つながり」の創出にも力を注いでいる。リカレント教育の充実、地域連携の強化も、つながりの幅広さをもたらしている。

現在、理念・目的・教育目標等を周知する方法としては、在学生に対しては、『キャンパスライフ』や『福岡女学院要覧』等の出版物、さらには、学内ホームページでの公告を行なっている。また、入学式等の行事、新入生一泊オリエンテーション、各学年に対する始業礼拝、春季および秋季キリスト教特別週間での告知を行なっている。春季キリスト教特別週間においては、「福岡女学院の歴史と建学の精神」、「福岡女学院大学の目指すもの」に関する講話が院長、学長によってなされている。先述のチャペルも、福岡女学院大学の学生としての自覚を促す効果を持っている。

教員および職員に対しては、毎年新任教職員オリエンテーションが４月～５月にかけて、毎週開催され、「福岡女学院建学の歴史」「福岡女学院のキリスト教主義教育」「キリスト教と旧新約聖書の入門」「キリスト教音楽」についての講話が、「セクシャルハラスメント対策研修会」ともに実施されている。教員に対しては９月に教員修養会、職員に対しては職員研修会が毎年開催されている。毎年ではないが、学院の全教職員を対象に「キリスト教教育フォーラム」も開催されている。

保護者に対しては、入学式・卒業式での学長の告辞をホームページで公開している。また、毎年５月と10月には「後援会（保護者会）」が開催され、その後の相談会では、様々な質問に回答している。また、毎年５月に行なわれる創立記念日には、学院の歴史写真展が行なわれ、創立記念礼拝・式典とともに学院の理念・目的が語られている。

受験生および一般の人々に対しては、大学案内やホームページで告知し、学外での入学説明会、学内でのオープンキャンパスや大学説明会において説明している。

ところで、本学においてはキリスト教に関する教育が理念・目標の達成に大きな役割を果たしているが、キリスト教に関わる教育や活動が、ともすれば「キリスト教」の修学に留まり、日々の精神にまで広がらない、または本学の教科教育の一部として把握され、本学全体に関わるものであるという認識に欠けるという問題もある。学院聖句をはじめとした本学の理念・目標は、大学案内や学生便覧等の公的刊行物、ホームページ、学院内の掲示等、多くの媒体を使用し周知に努めている。しかし、多くの学生や教職員がキリスト者ではない。かつ、本学に所属するまでキリスト教に触れることさえ少ないという現実においては、これらが本学の教育理念・目標として充分に認知されているとは言い難い。この対策として、2001年度より、学生に馴染みやすい言葉による「Number　OneよりOnly　One」というキャッチ・フレーズを作成し、教育理念・目標の周知の改善に着手した。2005年度には、このキャッチ・フレーズは浸透したと考え、「福岡女学院は人を育てる大学です」を新たに掲げた。

キリスト教精神の根本思想である「愛」の精神は、「目に見えないもの」であり、それだけに真の意味での周知については、信念を持って不断の努力をすること、継続性の大切さを自覚し、力を注いでいる。

「点検・評価／長所と問題点」

福岡女学院の120年にわたる建学の精神と歴史は、大学の理念にも確固として活かされている。その理念に基づいて大学は、神を畏れ、「愛」に生きることを要とした自立したよき社会人としての女性を育て、その「愛」に根ざした人間観・価値観を実践する女性を輩出しており、大学の理念・目的・教育目標は常に意識され、努力がなされ、達成しているといえる。

人類の歴史を貫いて永遠不変である神の愛を覚知し、ともに愛され、愛すべき隣人へのまなざしを持ってつながりを実践する、キリスト教主義教育の目的の浸透と達成のために、キリスト教に関わる教育やチャペル、ボランティア活動等が大きな役目を果たしているのは評価できる。

第二に、自立し社会貢献のできる女性の育成は、カリキュラムや女子教育という場によって達成されている。さらに本学院の歴史を支えた創始者や女性教員の働きや存在が女性のライフ・モデルを提供している。この女性教育の目的・理念は学内外を問わず、ほぼ浸透していると思われる。

第三に、カリキュラムによって、広い教養と深い学問の双方を目的としたことによる教育・研究は、ほぼ達成されている。今後の継続課題としては、今日的意味で教養とは何であり、どのように獲得されるものであるかについて、さらなる議論を続け、コンセンサスを獲得し、その具現化を模索する必要がある。

第四に、カリキュラムの充実および、少人数教育の実現によって、個性ある人材育成にも成功している。しかし、カリキュラムの多様化は、専門性の希薄化、大学運営上の負担という問題も招いており、バランスを保つことが今後の課題となっている。

なお、社会貢献についての点検・評価は、第10章で述べたい。

「つながり」の提供という視点からの点検・評価であるが、学生と学生、学生と教員という大学内でのつながりのみではなく、大学と高校、大学と卒業生、大学と地域等、多次元におけるつながりを構築していることは評価に値する。

時代の変容に合わせた教育目標を達成するために、各学部では改変を行なっている。この詳細については本章後述の学部項目を参照されたい。

キリスト教に関する教育と理念・目標の達成の周知については、馴染みやすい言葉によるキャッ

チ・フレーズの導入を行なった。キリスト者の少ない日本の実情を考えるなら、教育理念・目標そのものと、それを解したキャッチ・フレーズの併用は非常に有効であった。また、これらの周知については、ホームページやパンフレット等による広報の充実により、一定の改善がなされた。

学生は、他大学との交流や就職試験等、外部に本学の説明をすることが必要となる場合、これらのキャッチ・フレーズを活用している。入学試験において、本学の理念に共感を覚えたことを進学希望理由として挙げる者も増え始めた。本学の特徴が判りやすくなったと高校にも好評である。

「改善・改革の方策」

キリスト教に基づく教育の根幹を支えるチャペルの重視と充実については、大学宗教部委員会が中心になって、可能な限り情報を公開しつつ、議論を続けていく。キリスト教関連科目の教育についても、大学宗教部委員会にて不断に検討する。大学宗教部委員会をさらに活性化し、大学キリスト教センターの活動やボランティア活動もより強化していく。

時代や国を超えた普遍的な視野を持ち、社会をリードする女性教育の充実については、理事会と連携しつつ、学部長会議等の諸委員会において検討し、大学レベルで学習会等を行ない、教職員の意識を高めると同時に、これまで通り、社会に貢献する女性教育の姿を模索し続ける。

教養教育を含むカリキュラムの充実については、本学の理念・目的を反映しつつ幅広い知性を備えた人材の育成を可能にする内容の実現を果たすべく、学部長会議・将来計画委員会が中心となって、今後も点検・評価を継続する。

「つながり」の提供については、学部長会議・将来計画委員会等を中心として、現状を点検しつつ、維持・発展させていく。

社会貢献については、第10章にその詳細を譲るが、これまで通り本学の得意分野を活かした貢献を継続し、さらには行政や地域との連携を図る。

理念・目的・教育目標等の周知の方法については、学部長会議や入試広報委員会を中心に、現在の方法を踏襲しつつ、時代の変化に応じた新たな方策も模索する。

ところで、理念・目的・教育目標等の周知徹底は、印刷物やホームページ等の広報媒体によっても有効であるが、在学生、卒業生、そして教職員の実社会での活躍を通して、社会に認知されることのほうが説得力を持つ。今後は、各種委員会や各センターにおいても、実際の活動の検証を通して、豊かな情報発信の可能性を検討していく。

２．学部の使命・目的・教育目標

【人文学部】

①理念・目的等
Ａ群 大学・学部等の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的の適切性
Ａ群 大学・学部等の理念・目的・教育目標等の周知の方法とその有効性

「現状分析」

人文学部は、キリスト教に基づく人格教育を基に、広い教養と深い学問とともに、実践的実務能力を併せ持った現代社会の要請に応え得る女性の育成を目指し、現代文化学科、表現学科および英語学科を設置している。

現代文化学科は、「文化」をキーワードに、時間と空間を越えて現代社会を取り巻く関連諸領域に関する基礎知識の修得とともに、地域や国際社会の文化のつながりを通して、人間の行動様式を規定している文化の本質について理解し、地域的国際的な現代文化についての専門知識を持った人材を輩出することを目指す。

表現学科は、「表現」をキーワードに、言語・身体・造形・映像・音楽等の多様な表現方法を学際的に学び、自己から他者理解、さらには人間同士のつながりを生み出す全人的教育へ発展させ、個性的な表現能力・手段を持った人材を輩出することを目指す。

英語学科は、「英語」をキーワードに、今日的な諸問題に対処する実用的言語運用能力や教育指導者として必要な英語力や知識を修得し、人間と社会や文化のつながりに関する国際的な幅広い理解と知識を基に、異なる価値観に対する寛容さを持った人材を輩出することを目指す。

人文学部および３学科の理念・目的・教育目標は、大学案内やホームページなどにおいて公開され、一般に周知されている。

「点検・評価／長所と問題点」

人文学部、現代文化学科と表現学科においては、学部教育の理念に基づいて、学科の教育目標とそれに伴う人材養成の目的はほぼ適切であるといえる。その一つの根拠として、２学科ともに卒業生の就職状況が幅広い分野で好調である点が挙げられる。これは、学部・学科の理念・目的・教育目標である人格教育・教養教育・実践実務教育のつながりが実を結んだもので、教育目標と人材養成の目的とが社会的に評価された結果と考えられる。ただし、その一方で、学科によって学生の修学希望分野に偏りが見られ、それに対応する教育体制に充分な配慮が必要である。学部・学科の理念・目的・教育目標を重視しながらも、社会の変化に連動して変転する学生の修学希望にも対応しつつ、各学科の充実を図っていくことが求められる。

2003年度に発足した英語学科は、2007年３月に最初の卒業生を出すことになる。この時、学科の理念・目的・教育目標に適うような有能な人材が社会に輩出されることが期待され、それによって学科の教育目標・人材養成の目的の適切性が社会的に評価されるであろう。

人文学部および３学科の理念・目的・教育目標の周知は、充分に展開されている。

「改善・改革の方策」

学部として、学生の修学希望分野の偏りに対する改善などの検討を行なうために、学部教授会で、学部の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成が適切であるかを、実際の教育内容との整合性という観点から検証しつつ、各学科の特色を一層明確にしていく。また、学部・学科の新たな展開のために、必要に応じ学部教授会の議を経て、学部長会議において他学部と協力連携する可能性を探っていく。

【人間関係学部】

①理念・目的等
A群 大学・学部等の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的の適切性
A群 大学・学部等の理念・目的・教育目標等の周知の方法とその有効性

「現状分析」

人間関係学部は、建学の精神であるキリスト教に基づき、自立した女性として歩み、人との関わりを通じて、社会貢献を目指す女性の育成を目指す学部として1999年度に新設された。当初より「神を畏れ奉仕に生きるよき社会人としての女性を育成する」という理念を受けて、アイデンティティの確立と人間関係をどう捉え、その中でどう生きるかを探求することを目標としてきた。

完成年度を期に、本学部では将来の進路の目標をより具体的にするために、2003年度から１年次で主として教養科目とスキル科目を学んで基礎能力をつけ、２年次からコースを選択して専門性を高める科目を履修し、卒業時に「コース認定書」を取得することによってその成果とした。人間関係学科と人間発達学科の垣根はこれまで通り低いものとし、人間関係学科に臨床心理コース、キャリア心理コース、人間発達学科に生活環境コース、子ども教育コースを設け、自主的にコースを選択し、専門教育をより深く学ぶことを目的とする。

人間関係学科は、人の心とその働きに関する心理学の基礎知識を学び、自己・他者の理解を深め、さらに心の病理とその援助についての体験的授業を通して、人間関係を豊かにする力を養った上で、臨床心理コースとキャリア心理コースのいずれかを選択する。臨床心理コースでは、臨床心理学の知識と技能をさらに深めて各種カウンセラー、相談員、指導員を目的とした人材養成を目指し、キャリア心理コースでは、社会心理学関連の幅広い知識を深め、社会や企業の中で組織を考察できる社会人を目的とした人材育成を目指す。

人間発達学科は、心と身体の健康を基盤とする人間の暮らしについて幅広く学ぶ。生活環境コースでは、生活者としての人間が直面している生活や環境の問題（家族、健康など）を、衣・食・住に関連する領域の学びを通して、社会における生活者としての在り方を探求する人材の養成を目指す。子ども教育コースでは、乳幼児心理学をはじめ幼児の発達段階に応じた援助法等を学び、子どもの気持ちを大切にするとともに養育者の相談にも対応できる、優れたコミュニケーション能力を持った保育者の養成を目指す。

周知については、人文学部と同様である。

「点検・評価／長所と問題点」

人間関係学部「人間関係学科」と「人間発達学科」は、神を畏れ社会に仕える女性を育成する本

学の教育理念に基づいて、より専門性のある教育を目指すために、2003年４月から１年次に基礎能力をつけ、２年次から専門コースを自主的に選択する教育方法を採ったが、それぞれの学科の教育目標を概ね達成しているといえる。2007年３月卒業時には、50単位以上のコース科目を修学して「コース認定書」を得ることになる。しかし、人間関係学科は、その教育内容を充実させているものの、学科名称と教育内容の関連情報に対する受験生への認知度が充分でなかった。2006年度からの「心理学科」への学科名称変更により、教育研究内容をより正確に伝える努力をすることが肝要である。

人間発達学科は、学科内での学生の修学希望分野の偏りに対して適切に対応する必要がある。学部の教育目的を常に明確にしつつ、学生の要望に応えるために修学分野の充実を図る努力をしなければならない。

人間関係学部は、教育研究領域の深化充実により、学科名の改称の動きに見られるように、専門分野がより明瞭になりつつある。さらに充実を図るとともに、これからは教養教育の充実等をより明確にして、学部理念・目的に適う教育を実現する努力が求められる。

「改善・改革の方策」

これまで以上に、学部教授会が中心となって、学部・学科等の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的を常に検証し、修学分野の充実を図りつつ、周知も積極的に展開していく。

具体的には、人間関係学科においては、「人間関係」という名称を、教育目標を明確に表し、かつ世間一般にも判りやすい「心理」学科に、2006年度に変更する。また名称変更を踏まえ、2007年度に向けて、学科会議が中心となって、教育研究領域の充実も図る。

一方、人間発達学科では、2007年度に「子ども発達」学科と名称を変更し教育内容を大きく見直し、保育士資格のみでなく、幼稚園教諭１種免許状も取得できることを目指す。これらの大きな飛躍については、ホームページを通じて、積極的に広報していく。

上記のような両学科の名称変更と教育目標の明確化は、自立した女性として歩み、人との関わりを通じて、社会貢献を目指す人材を養成するという学部の理念を具現化するものである。今後、両学科とも、2007年度以降は、これらの改革を土台に着実に人材を養成していく。また学部の理念・目的のさらなる展開のために、学部を超えた改革が必要となる場合には、学部教授会の議を経て、学部長会議で検討する。

３．大学院研究科の使命・目標・教育目標

【人文科学研究科】

Ａ群　大学院研究科の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的の適切性
Ｂ群　大学院研究科の理念・目的とそれに伴う人材養成等の目的の達成状況

「現状分析」

既述のように、理念・目的を実現するため、本学は1990年に人文学部を、1999年に人間関係学部を創設したが、今日の状況はより高度な知識とより高い専門性を持った女性の社会進出をさらに求めてきている。そこで本学では、上記２学部に基礎を置き、学術の理論とその応用を学ぶとともに、高度な専門性を持つ職業を担う人材の養成を使命として、2003年大学院「人文科学研究科」を設置した。人文科学研究科は比較文化専攻と臨床心理学専攻に分かれており、前者は急速に国際化する社会に対処できる専門知識と広い視野を有する能力を持ち、国際化社会に対応できる人材の育成を目的とし、後者は多様化し複雑化する社会において心のケアを行なう能力を有する人材の育成を目的としている。

なお、設置当時は男女共学であったが、「現代社会の要請に応え得る女性の育成」という本学の根本理念に立ち戻って、2005年度より女性のみの入学とした。

「点検・評価／長所と問題点」

比較文化専攻、臨床心理学専攻とも、理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的は適切であり、達成も順調である。

「改善・改革の方策」

大学院は2003年に発足してまだ３年である。これまでのところ、使命・目標と人材養成の関連は適切であり、目的も達成している。したがって、研究科委員会を中心に、現状を維持していくと同時に、点検を行なっていく。